



杉村会 老健施設長 西川 博

このたび、熊本大学医学科後援会会長を拝命するとともに肥後医育振興会の評議員に任命されました。

私の経歴を紹介いたします。

医学部に行こうという気は高二まで全くありませんでした。中学生の頃から防衛大に進み海上自衛隊に入るつもりでした。しかし、防衛大を受験するためにには裸眼視力が一・〇以上必要と知り、挫折し悩んでいた折、大学病院に結核で入院していた母の主治医である副島先生（のちの川崎医大呼吸器内科教授）から勧められ医者を目指すことにしました。しかし、一九七三年九月、自衛隊違憲判決が報道され、生きるために最重要なのは防衛力ではないかと反骨心が湧き上がり、六年生ではありましたが、自衛隊に入ろうと決心し自衛隊奨学金を申し込みました。卒業後、

東京の自衛隊中央病院研修に行かねばならないところを、母の結核が重症だったため、地元の第一内科で研修することになりました。研修と外勤を終え、一九七七年四月に自衛隊熊本病院に就職しました。自衛隊勤務は常に緊張する生活でしたが、生き生きと充実した楽しいものでした。

一番の思い出は、自衛隊札幌病院長であった二〇〇九年五月に三日間にわたる全国の衛生隊を巻き込んだ大規模新型インフルエンザ対処訓練を成し遂げたことです。訓練の動機は二〇〇三年のSARSに現地の医療者が罹患し、犠牲者を多く出し、医療が窮乏する様を見て、将来日本での新型ウィルスパンデミックに備える訓練が必要と痛感したからです。訓練の始まる四月、たまたま新型インフルエンザが日本に上陸し感染不安が広がる中でタイムリーで有意義な訓練となりました。

二〇二〇年二月新型コロナウイルスが日本でも発生し、大型客船や検疫所また、自衛隊中央病院でも大勢の感染者の対応に多くの隊員が関わりました。

しかし、自衛隊医療者に一人も感染者が出なかったことは、長年感染防止訓練を積み上げてきた成果だと思っています。

その後も自衛隊の縁で北九州医療刑務所（四〇〇床以上）の所長、某クリニックの立ち上げ、そして現在に至っています。

さて、私と熊本大学医学部との関係は卒業以来悪くはありませんでした。ところが、一九八五年、医学部が自衛隊に非協力的になって以来、個人的にも疎遠な関係となってしまいました。その中、二〇一八年娘が医学部に入学し私が医学科後援会理事になったことで、母校愛が芽生えてきている今日この頃です。

今の人達の中には、「何もしないほうが得」という考えがあるようですが、その心を捉える方法はあるのではないのでしょうか。肥後医育振興会の理念、活動には全面的に賛同しますし、その社会的活動は十分ではないかと思いません。ただ、活動資金増のために会員数の増加努力が必要ではないでしょうか。

また、産学官の多様な能力を結集させることが今盛んに唱えられていますので、母校には防衛省を取り込んだ度量の広い考えを持つような人材を育ててほしいと願っています。

